

[研究論文]

## ＜マブイ小説＞にみる琉球弧の世界

与那覇 恵子（本学国際社会学部 教授）

1. はじめに
2. 琉球弧の死生観 — ＜マブイ＞という存在
3. 外部の力を導入する＜琉球弧＞
4. おわりに

### 1. はじめに

島尾敏雄は日本を島々（ネシア）の連なりと考え、大きく「琉球弧」「本州弧」「千島弧」の三つの文化圏が共生する空間と見なし、太平洋の島々とも連関する視点を持つ名称として日本を「ヤポネシア」<sup>1</sup>と名づけることを提唱した。ヤポネシアに属する「琉球弧」もまた大きく「沖縄諸島」「宮古諸島」「八重山・与那国諸島」の三つの文化圏に大きく分けられる。三地域とも基層は琉球文化圏に属しながら、その地理的・歴史的・政治的な状況からそれぞれ異なる独自の歩みを辿ってきた。もちろんそこには島々を繋ぐ強固なネットワーク<sup>2</sup>もあった。

歴史学や民俗学は、早くから琉球弧の重層性に注目してきた。沖縄の現代文学もまたそれらの成果を導入しながら現実の島々を揺さぶる

文学的空間を創出してきた。例えば大城立裕の『後生からの声』(文藝春秋・1992)、又吉栄喜の『豚の報い』(文藝春秋・1996)、池上永一の『風車祭』(文藝春秋・1997)、目取真俊の『魂込め』(朝日新聞社・1999)、崎山多美の『ゆらていく ゆりていく』(講談社・2003)、大城貞俊の『G米軍野戦病院跡辺り』(人文書館・2008)などには、琉球弧の人々の死生観を彩るマブイ<sup>3</sup>の行方や冠婚葬祭に関わるユタ<sup>4</sup>の存在といった琉球弧に独特の信仰形態が、人々の日常生活に密着に結び付いていることが示されている。もちろん形骸化した信仰の形は未来をひらく鍵とはならず、人々を抑圧する装置ともなる。

とくに1960年生まれの日取真俊の作品には日本とアメリカに支配され、伝統的な文化が力を失って深い暴力の闇に閉ざされた沖縄が描かれる。それはまさに現時点の沖縄の置かれた姿である<sup>5</sup>。沖縄とはしかし、現在だけの、あるいは戦後だけの、あるいは琉球処分後からの沖縄だけではない。沖縄にはまだ様々なポテンシャルが内包されている。その重層的な可能性を自由に広げて編みあげようとしているのが1970年生れの池上永一である。琉球弧の文化や言葉と自在に戯れながら池上永一は琉球弧を創出する。今回は小説に描かれた琉球弧の精神的支柱である〈マブイ〉が、現代の沖縄の小説にどのように表現されているのか、民俗学的知見も援用しながらその世界を見ていきたい。

## 2. 琉球弧の死生観—〈マブイ〉という存在

### 1) 白石弥生「迷心」

沖縄諸島では一般的に人は死によって社会的存在としての機能が終焉するのではなく、死後も現世の人々との繋がりが続くと考えられている。それは〈マブイ〉が不滅ということでもあろう。死者は死後、

一定の時間を経て祖霊（ウグンス）となり、家族の健康、繁栄、安全などを守る守護神になる、とされる。子孫が守護を受けるためには位牌（トトローメー）を拝み、先祖の供養（御願）に努めなければならない。御願不足（ウグンプソク）の場合には、病気や災難などの祟りがあるとされる。琉球弧では＜マブイ＞を通して生者と死者は深く結びついているのである。

マブイの声を聞くのはユタであるが、白石弥生（1946年長野県生）の琉球新報短編小説賞を受賞した「迷心」（『琉球新報』1987年1月4日）には死者をめぐる「内地と沖縄の習慣」の違いを、ユタが語る。長野から沖縄市にきたヤマト嫁<sup>6</sup>悠子は、ユタの存在に疑問を抱きつつも死んだ実母の今の願いを知りたくてユタに母の境遇を判断してもらう「判じ」を依頼する。ユタは「内地<sup>7</sup>」から来た彼女に、死者に対する沖縄の習慣を分かりやすく説明する。

「ひとくちに言えば、向こうは葬式や法事や盆に、坊さんにお経あげさせて、お前は死んだのだからあきらめてはやく成仏しろって、あたまから抑えるわけ。いくらこの世に心残りがあっても、早くあちらに行きなさいって追っ払ってしまう。金持ちの家なんか、葬式にも何名も坊さん頼んでお経あげさせるけど、坊さんの数が多ければ多いほど霊を強く抑え込んでしまうから、却ってかわいそうなことしてるよ。そこへいくと沖縄は、ユタに頼んで、霊がこうしたい、ああしたいと言うことを聞いてあげるわけ。それから、さあもういいでしょ、これで気がすんだら心おきなく彼岸に行きなさいって、やさしく送ってあげるようになってるわけ」（『沖縄短編小説集』琉球新報社・1993、238頁）

「霊」の声を聞くのか聞かないのか、その供養する方法が違うのだ、

とユタは語る。そして母親が求めているのは「線香」だと指摘し、線香を供えればすべて「上等」だと諭す。このユタは死者になり代わって死者の思いを語る口寄せを行なってはいない。だが悠子はユタの言葉に動かされたかのように、今度は母のマブイを口寄せするユタを求めるようになっていく。小説の最後では、口寄せするユタを求めて信仰心の強い地だといわれる屋慶名に向かう悠子が予感されている。ヤマト嫁の心が琉球弧の民俗に馴染みはじめていくことは確かなことだろう。

ここで、琉球弧の死生観に重要なくマブイについて加藤正春氏の説明を参考に少し補足しておきたい。

沖縄では人のもつ靈魂のことをマブイ、マブリ、マブヤーという。「マブイは人の生命原理であり、この順調な機能によって人は日常生活をつつがなくおくことができると考えられて」おり、「人は普通複数のマブイ」を持っているという。さらに「マブイは身体から遊離する性質をもち」「マブイが遊離すると人は衰弱し、病気や事故にあう」とされる。身体からマブイが遊離することをマブイウトシ、マブイウティ（魂落ち）、マブイヌギ（魂抜け）という。身体から遊離したマブイは、靈魂を身体に込めるマブイグミという儀式を行なわなければ身体に戻らない。これを行うのは儀礼に精通した年輩の女性で、親族では祖母（オバァ）が行なうこともあるが、ユタに依頼することも多い。マブイが身体に戻らない時は死を迎えることになる。

沖縄の現代文学には様々なマブイが描かれるが、マブイグミが成功せずに死んでしまう人物を描き、マブイの概念に再考を迫る作品が目取真俊（1960年沖縄今帰仁村生）の『魂込め』である。

## 2) 目取真俊「魂込め」

『魂込め』の幸太郎は乳飲み子のとき戦争で両親を失った。幸太郎

は子供の頃には年に五、六回、成人しても年に二、三回は魂<sup>まぶい</sup>を落としてきた。五十歳を過ぎて魂を落とし、生気のなくなった幸太郎の体にオカヤドカリ（アーマン<sup>9</sup>）が入り込む。村一番の神女<sup>かみんちゆ</sup>で、幸太郎の姿をした魂<sup>まぶい</sup>を見ることが出来るウタの力をもってしても魂込めはうまくいかない。生身の幸太郎の身体は日ごと衰弱し、アーマンは巨大化していく。そして海ばかり見ていたマブイの幸太郎は、ウタの見ている前で「砂に吸い込まれるように足元から消えて」いく。マブイの消滅とともに肉体もまた死を迎えていた。村の者たちが死んだ幸太郎の体から無理やりアーマンを引きずり出しとどめを刺そうとした時、ウタはアーマンの目に幸太郎の母を感じる。だがその時、アーマンは殺されてしまう。

八重山にはアーマンが島を創ったという創生神話がある。この小説の舞台は戦前に「海軍の特別攻撃艇の基地」があった戦争の激戦区だが、自然は豊かで海亀が産卵に来る場所でもあった。小説に明確な地名は記されていないが、沖縄島の糸満・小禄の一角だと思われる。小説の現在時は1995年頃で、半農半漁の集落となっている。だが海亀が産卵に訪れる場面などは、五十年前の時間と交差している。アーマン神話は沖縄島のものではないが、琉球弧の民俗として交差しているともいえる。

ところで、一定の供養を経て個々のマブイは消失し、祖霊となり子孫の守護神となる。「神になった祖霊は、決して幽霊になって現われたり、子孫に病気などの災害をあたえることはなくなる」（『沖縄文化史辞典』東京堂出版・1972）という。その一方で琉球弧全体に海での遭難をはじめ異常な死に方をした者は生者に不幸をもたらすという観念が存在する。死後に存続する死者のマブイ（シニマブイ）と決別するには丁寧な葬送儀礼を実施しなければならないが、不完全な場合には生者に祟り災いをもたらすのだ。子孫に祟らない、子孫の繁栄を願う

祖霊になることが琉球弧の人々の願いであるようだが、そのためには先祖の声を聞き、きちんと供養することが必要とされている。ユタや神女は先祖の霊と交流し、子孫に先祖の声を聞き届けなければならないのだ。

幸太郎の母は海亀の卵を取ろうとして、米軍か日本軍かはっきりしない機銃で殺された。その後、死体も不明になっている。一歳足らずの子供を残しての死は、現世に強い執着を残したといえる。アーマンは現世に未練を残したシニマブイ（母親の魂）が子孫に崇る物語の象徴なのか。それとも子供を自分のもとに呼び寄せたいと願う一途な母の思いなのか。どちらにしてもこの小説では、伝統的なマブイ観念をグロテスクなおカヤドカリで表現し、村人たちに嫌悪の感情を与えている。死者が崇るというシニマブイの概念をアーマンに与えることは、戦争で多くの人が死んだ戦後沖縄の現実を愚弄するものであるだろう。アーマンが何を象徴しているのか。様々な読み<sup>10</sup>が提示されているが、ここでは戦後五十年で醜く変わった沖縄の精神性と捉えたい。現世は母が命をかけて守りたいと思った子供の住む場所ではない、という意味にもなるうか。

小説の最後は幸太郎の四十九日が終わった後、浜辺に立つウタを描写する。「ウタは立ち止まり、海に向かい、手を合わせた。しかし、祈りはどこにも届かなかった」と、閉じられる。死者のマブイも生者のマブイも共に救うことができなかった神女の限界も示されている。『魂込め』は、琉球弧のコスモロジーが戦後明らかに変容したことを指摘し、その再構築を迫っているといえようか。

### 3) 又吉栄喜「豚の報い」

既に述べた不慮の事故死などで死んだ者の死霊は崇るという観念をシニマブイ共同体の束縛と捉え、その発想を逆転させ死者の骨を御嶽の「神」と

して祀ろうとするのが又吉栄喜（1947年沖縄浦添市生）の芥川賞受賞作「豚の報い」（『文学界』1995・11）である。この小説もまたマブイ落ちの話から始まる。

スナック「月の浜」に突然豚が闖入し、驚いたホステスの一人がマブイを落とす。偶然スナックに居合わせた大学一年生の正吉は、成り行きから自分の生まれた「真謝島」で、マブイグミの儀式を行わざるをえなくなる。小説の舞台となる真謝島は沖縄本島中部の勝連村の港から船で30分の場所とされている。真謝島には御嶽<sup>ウタキ</sup>が方々にあり、「神の島」とも呼ばれている。真謝島は架空の地名だが、現実の場としては浜比嘉島を想定しているようである。

正吉がホステスたちの懇願を引き受けたのには理由があった。漁師だった正吉の父は漁に出た後、無残な死体で浜に流れ着く。「真謝島には、非業な死に方をした者は十二年間墓に納骨できない」という習慣があり、門中墓には納骨されなかった。風葬の習慣は廃止されていることになっているはずなのだが、正吉の父の遺体は風葬にさらされ十三回忌を迎えてはじめて墓に入ることを許されたのである。父の遺骨収集と納骨を目的としたマブイグミであった。だが彼は、父の骨を見て一族が祀られる門中墓に納める決心が崩れる。「門中墓に閉じこめられている人たちは何も見えず、何も聞こえず、静かに安らかに眠っている。だから、悟りもなく、神にも昇華しない」と、決めつけるのである。ここにも伝統的な共同体の習慣を非難する眼差しがある。そして非業の死と風葬によって「父は美しく、たくましく変わり、神になった」と認識するのだ。門中に組み込まれない、父の骨のある場所を新たに祀られる御嶽にしようと決心するのである。

この小説も1990年代の沖縄を舞台にしている。正吉は、門中の父の死の扱いに対する疑問もあり、琉球王府の宗教観も調べていた。ユタにも興味を持ち、「死んだ先祖は神になり、生きている子孫の願い事を

聞き入れる」という観念を受け入れてきた。若いホステスも含め登場する者はすべてマブイは落ちたり込めたりするものだと信じている。ある意味流通しているマブイ観念が表現されているといえるが、この小説の特異な点は、沖縄の文化において共同体の祭祀を司る神女の役割を息子が担おうとしていることにある。さらに沖縄本島においてはユタとノロの役割は明確に区別されているが、正吉は二つの役割を一身で引き受けようとしているのだ。

琉球弧の伝統的な文化装置を用いながら、「豚の報い」にもまた固定化した沖縄共同体のアイデンティティから逸脱しようとする発想がみられる<sup>11</sup>。それは共同体の文化を根にしなが、別の方向性を模索する営みのようにも思える。さらに正吉の行動は琉球弧の精神性を担ってきた母権・女権<sup>12</sup>の父権・男権への移譲も予感させる。もっとも「女たちや俺に拜まれると父も正真正銘の神になる」という言葉もあり、父の〈マブイ〉は男女の協力によって御嶽の神になる、という戦後民主主義的な創生神話が目論まれていると読むことも可能だろう。

#### 4) 目取真俊「伝令兵」

沖縄戦で多くの人間が殺された沖縄本島は、現代も〈シニマブイ〉が彷徨う島といえるかもしれない。沖縄には供養されない死者が「幽霊」となって出現したという話も多い。川村湊氏の「沖縄のユリー」(『へるめす』1996・1)には、沖縄の各地で「霊」(シニマブイといえよう)に出会ったという体験話がいくつも紹介されている。沖縄の幽霊話で独特なのは沖縄の地上戦で死んだ民間人や日本兵、米兵が多く目撃されているということである。そこで紹介されている話の多くは「怨み」を残して死んだ者たちの霊の話だが、小説世界はまた異なった位相をみせる。

例えば目取真俊の「伝令兵」(『群像』2004・10)には、都市伝説の



一種ともいえる幽霊が登場する。この小説の現在は1990年代後半、場所はコザの街である。視点人物は三〇代半ばと四〇代半ばと思われる金城と友利である。コザの街には1970年代頃から「首」のない鉄血勤皇隊<sup>13</sup>の少年伝令兵が出現するという噂があった。金城は米兵に絡まれて逃げる途中、何者かに後ろから抱えられ自動販売機の陰に引き込まれる。すると米兵に、金城の姿は見えなくなる。金城を助けたのは首のない伝令兵だった。彼は敬礼して走り去った。

金城の話聞いた友利は、首のない伝令兵が写っている1970年のコザ騒動の写真を見せる。それは友利の父親が撮ったものだった。幼馴染みの伊集とともに父も鉄血勤皇隊だったが、伊集は伝令に出たまま行方不明になる。父が探し回って見つけたのは首のない伝令兵だった。写真に写っていたのが伊集だと思いこんだ父は、彼を探し回って仕事も疎かになり家庭は崩壊していった。父の死後、友利は家庭を持ち娘も生まれたが、娘が交通事故で死んだ後、彼の家庭も崩壊する。

友利の家は無為に死んだシニマブイに祟られているのだろうか。しかし、首のない伝令兵は金城を助け、自殺しようとした友利も助ける。伝令兵は死んだことを知らないままに彷徨っている＜マブイ＞と噂されている。ということは、彼はまだ果たしていない何らかの使命を果たすためにその地に居るといことになろうか。彼の出現の最初の記録は1970年のコザ騒動である。米軍の支配下に地元の人々が激しい怒りを表現した日だった。当時、沖縄が1972年に日本に復帰することは決定していたが、基地を存続させたままでの復帰であった。

事故や戦争で死んだ者のマブイに対しては、マブイが心安らかに先祖の住む後生<sup>グシヨ</sup>に行けるようにするマブイワカシとヌジファ（抜霊）という儀礼がある。マブイワカシはユタが死者の現世<sup>イチミ</sup>に対する執着を聞き、それを解消して心残りなく後生に送る儀礼である。ヌジファは死んだ場所にあると考えられるマブイをその場所から抜き取り（小石や

土塊などの場合もある)先祖の墓に持ち込み、マブイワカシと同じように話を聞き、丁重に供養して後生に送る儀礼である。

このような儀礼を通して伝令兵のマブイを後生に送ることはできるのだろうか。おそらく不可能であろう。鉄血勤皇隊の最終的な任務は勝って戦争を終わらせることにあるのだから。復帰が決まっても米軍の基地が存続する以上、沖縄戦は終わっていないといえる。彼の現世への執着は未だ解消されていないのだ。1970年代の彼の出現は復帰しても〈戦後〉は始まらないのだということを含意し、未だ戦争が続いている状況を示す。伝令兵は現在も沖縄が戦争状態<sup>14</sup>にあることを象徴するマブイであるといえるだろう。

### 5) 大城貞俊『記憶から記憶へ』

大城貞俊(1949年沖縄大宜味村生)の『記憶から記憶へ』(文芸社・2005)には、沖縄戦を生きた市井の人々の生活を描いた三話がオムニバスの形式で収められている。ここでは「第二部 <sup>ウムカジヌ</sup>面影の立てば」の、戦中・戦後を激しく生き抜いた女性加那の〈イチマブイ〉語りを中心に見ていくことにする。

小説は八十八歳の生年祭トーカチを迎えた加那の語りと、祝い会場の様子を伝える息子の視点で交互に展開される。小説の冒頭はまず次のような加那の語りで始まる。

アイエナー、あんたよ、やっぱり来てくれたんだねえ。きっと、二人の魂は向かい合っていたんだねえ。私の初恋の人、村上隊長さんよ。私はあんたの<sup>ウムカジ</sup>面影を、忘れたことはなかったよ。ありがとうね、本当に嬉しいよ。でも……、遅すぎるよ。私は、もうこんな婆さんになってしまった。もうレンアイも出来ないさ……。

今日はね。私のトーカチ祝いだよ。米寿の祝いさ。私のために

ね、子供や孫、そして親族のみんなが集まっているんだ。(62頁)

加那は家族の者たちからも呆けていると見なされ、九年間施設で暮らしてきた。トーチのその日は、多くの人が出席している会場に主賓として座らされている。加那はすでに息子たちを認識できなくなっていると見なされているが、誰も理解できないぶつぶつと呟く加那の語りは、引用部分においては加那が事態を認識していることを示す。しかし一方で、彼女がこの会場で出会うのは「亡霊」ばかりである。

さて、冒頭の村上隊長とは昭和18年に島(宮古島をイメージさせる)に来た日本軍の隊長である。一八歳で隊長の身の回りの世話をする役割を与えられた加那は隊長に惹かれ、長男を産む。それを実家の両親も喜んだ。戦後、隊長は広島に戻り、加那もその後を追うが、広島には妻子がいた。加那は王府時代から続く「現地妻」のパターンといえる。しかし作者は加那を被害者としては描かない。広島では村上とも会いつつ、性欲と憐れみに突き動かされて、原爆で妻子を喪った大西とも関係を持つ。そして三人目の子をもうける。

村上の死後、沖縄に戻った二八歳の加那は、歓楽街であったコザの中之町やアメリカ兵相手のAサインバーで働き、三十代後半からは軍作業員として基地に勤め、日本人との間に生まれた三人の息子を大学まで出す。息子たちの前では一生懸命働く母を演じていた加那は、お金欲しさのためにアメリカ兵サンダース軍曹を手引きし同僚のユミコをレイプさせ、彼女を自殺においやったこともあるらしい。そんな自分の人生を彩ったユミコやサンダース軍曹の亡霊も祝賀会に出現するに及んで、加那は次のような感慨を催す。

なんだか私も、戦争が終わってから、すぐ亡霊になったような気がする。戦争のときに、本当の私は、死んだんじゃないかね。

戦争が始まったら、私のマブイは、私を嫌いになって逃げ出したのではないかね。私は、マブイに捨てられたことになるのかな。そうだとしたら、悲しいね……。 (108～109頁)

ところで、この引用の前半の「戦争がおわってから」の「戦争」は現実に起こった沖縄戦を指し、三行目の「戦争が始まったら」の「戦争」は沖縄戦終結後、つまり一般的に言われる「戦後」を指す。小説の後半で「沖縄は戦後も戦場さ」と語る加那の言葉に、沖縄は現在も「戦争」状況であることが示されている。「戦争」が始まってマブイに逃げられたことを悲しむ彼女は、しかしすぐに「この沖縄でトーチカを迎える人」は沖縄戦を「生き延びてきた人たち」であり、「だれもがみんな、人の道を外した過去を持っている」と断言する。そうしなければ「生き延びることが出来なかった」と、マブイに逃げられた現在の自分を肯定する。

琉球弧では魂は個人の中に複数存在しているといわれているが、戦後加那から逃げ出したのは世の中の状況をよく知らない「うぶな娘」の「マブイ」だったといえようか。加那は村上隊長と出会った戦中が「私の唯一のバラ色の時代」と言い、「女にとってはね、戦後こそがイクサ場なのよ。たくさんの嘘をつかなきゃ、生きていけないのよ」と語っている。純情な娘から逞しい女へ。

加那は男のように「性欲」に突き動かされて行動する女性としても描かれている。男も自分の性欲のままに選び取っているのだ。状況に応じて主体的に生きてきた加那に被害者意識は存在しない。「戦後こそがイクサ場なのよ」と認識してきた加那には戦場を生き抜く才覚こそが必要であった。村上、大西、サンダース軍曹へと向かう性欲は、生き抜くための生命力とエネルギー溢れたもう一つの〈マブイ〉ともいえるだろう。それはある意味、日本とアメリカの支配を生き抜いてき

た「戦後沖縄」のマブイの姿といえるかもしれない。

小説の最後は、花束を贈られ大きな拍手に包まれる加那の喜びが語られる。

アリィ、この大きな拍手は、生き延びてきた私の過去を、みんな許してくれているんだよね。よく生き延びてきた、よく頑張ってきたと、労をねぎらってくれているんだよね。少し、照れくさいけれど、これからも胸を張って、堂々と生きていかなきゃね。

(109頁)

おそらく「みんな」の中に加那のうぶなマブイも死んだ者たちのマブイも含まれているのだろう。ところで昭和と同じ生まれの加那が八十八歳を迎えるのは2013年である。小説が発表されたのは2005年である。現実の時間軸に沿ってトーカチの祝いが実際に催されたとすると、加那の妄想と現実の祝賀会が交互に展開する小説の場は近未来ということなる。加那の死は定かではないが、加那には死んでも生き抜く戦後沖縄の＜マブイ＞が表象されているといえないだろうか。トーカチは、未来も生き続けているマブイを祝う場としても表現されているのである。

### 3. 外部の力を導入する＜琉球弧＞

#### 1) 池上永一 — <sup>マブイ</sup>魂を救う作家としての出発

八重山で暮らす少女がユタになる成巫過程をユーモラスに描いた小説『バガージマヌパナス』（新潮社・1994）で、日本ファンタジーノベル大賞を受賞した池上永一の作品には、マブイが溢れている。

池上永一は、1970年5月24日沖縄（復帰前なので沖縄県ではない）

那覇市で生まれた。いわば復帰後世代といえるわけだが、琉球処分の歴史や現在も続く米軍基地の存在が示すように、その歴史は「あまりにも惨めな歴史ばかりだった」<sup>15</sup>ので、それがとても嫌だったという。三歳から中学卒業までは石垣島で育つ。本を読むのが好きな子供で、その時期に図書館にあった『伊波普猷全集』を読む。伊波の沖縄の古謡や言語を残そうとする発想に驚嘆し、その時「オレたちのルーツ」がある、これは「誇り高く生きられるバイブル」<sup>16</sup>だと認識したという。続けて喜舎場永珣『八重山民俗誌』（沖縄タイムス社・1977）や宮城文『八重山生活誌』（自費出版・1972）なども読み、八重山の文化と歴史に深く触れていく。さらに後年、折口信夫の著作に触発され、地元の人々にも忘れられた幻の天人御嶽デンビトウを探し廻ったという。このように池上作品の根底には膨大な民俗知に加えて自然と土地の記憶が織り込まれている。

『バガージマヌパナス』は八重山の石垣島を舞台に、「不幸な私」とは無縁な少女綾乃が「世界の人たちを救う」ユタとなる物語である。一九歳の綾乃は、不幸な出来事に出会った者がユタになるという土着的ユタ像からは逸脱している。綾乃は死者の声を聴き、その記憶を引き継ぎ、その魂を癒すマブイユタとなるわけだが、池上は、最初の作品から文化の負のイメージを「誇り」ある文化に書き換えている。

綾乃は祭る者のいない霊の声を聞くユタである。幼い頃から靈感の強かった彼女は考えたり悩んだりすることが嫌いな性分であり、島でノンビリと過ごすことに満足していた。しかし、ある日突然「ユタになりなさい」という神のお告げを受ける<sup>17</sup>が、それを拒否して神とのバトルを繰り広げる。そしてバトルの最後に、誰にも顧みられることのないマブイが光となって消失してしまう虚無空間を目の当りにする。その空間に現れた祖母のマブイは、綾乃にユタの役割を諭す。

「今の現世の人たちは、見えるものばかりを信じていて、誰も私たちを振り返ってはくれないの。それを人々に伝えるのがユタの役目なんだよ。ユタが私たちの世界と交信することで多くのこの世界の人たちが救われるんだよ」(194～195頁)

『バガージマヌパナス』では、子孫を守る先祖のマブイになれずに光の渦に消えてしまうマブイを救う存在としてユタは造型されている。生者の悩みを聞く者<sup>18</sup>でもあるが、死者の個々人の魂の悲しみや痛みを聞く者としてのユタである。それは憎悪や被害者意識に拠らないもう一つの文化の創造といえる。日本ファンタジーノベル大賞の選考委員高橋源一郎は「ファンタジーとは堅牢に見える目の前の現実を揺さぶり、そこではないどこかにある『現実』を発見させる力なのだ。」「『バガージマヌパナス』の作者は、『南島』にファンタジーの根源を求めた。そこは日本であると同時に日本ではない。」「ファンタジーというものが、ほんとうは現実への最大の『批評』であることをこの作品は教えてくれるのである」(「選評」『バガージマヌパナス』付録)と、その批評性を高く評価している。

池上は喜舎場永珣などの著作に触れ、実生活では消えてしまった琉球弧の「不滅の魂」<sup>9</sup>が、それらの書物にはあると感じてきたという。作家である池上永一は「私のマブイが戻る場所は、物語中の島である」(『風車祭』「あとがき」)とも語っている。現実にはマブイを救うユタになる決心をした綾乃と、書物によってマブイを不滅にしようと決意した池上の意識とは重なるものがある。『バガージマヌパナス』は池上の作家宣言の書ともいえるだろう。

一方、『風車祭』の「あとがき」には「私もまたマブイを落とした経験を持つ。」「マブイを喪失していると知ったときの衝撃は、どうして私が生きているのかという疑問につきた」とあり、池上個人のマブイ落ち

体験が述べられている。藤原理加氏の「BIOGRAPHY 作家・池上永一の作られ方」（『野性時代』2008・9）には、高校時代の通学路でマブイを落とし「ユタにマブイ籠めをしてもらう」と記されてもいる。マブイを肯定する池上の心情は、死者と交流する祭である「十六日祭」<sup>ジュエロクニチ</sup>と「清明祭」<sup>シエミエ</sup>について語った次の言葉にも明らかで、それは琉球弧の信仰心につながるものである。

死者と生者がともに酒をかわすと、不思議と自分の命が死後も続いていくことを確信できる。僕はひとり人間である以上に、ひとつの連鎖する魂の流れのなかにいる。肉体はやがて枯れるが、魂は亀甲墓の子宮に帰り不滅の存在になる。（『やどかりとペットボトル』河出書房新社・2006年、126頁）

作家として、ひとり人間として、池上の〈マブイ〉は琉球弧の祖先と確かに繋がっているのである。

## 2) 永遠のマブイ空間 — 『風車祭』<sup>カジマヤ</sup>

主に個人のマブイを救うユタの役割を描いた『バガージマヌパナス』で小説家として出発した池上は、『風車祭』<sup>カジマヤ</sup>では島の空間が祖霊を、さらに祖霊が子孫を救う壮大な島空間を創出する。八重山諸島の文化や歴史や言語や歌謡を内包した土地の記憶を縦横に駆使したこの物語は、現実社会を描写するのではなく未来にも〈誇れる島宇宙〉を提示する。マブイも個人のマブイを超えて、次のように観念される。

「マブイはその人の性格を含んでいるけど、それは現世でできた便宜的な色の違いにすぎないんだよ。マブイの本質は人格を超えた巨大な宇宙さ。時代や場所が変わっても、おまえとおまえの家系に



流れている永遠の空間だよ」(『風車祭』<sup>カジマヤー</sup> 文春文庫<sup>21</sup> 249～250頁)

「家系」とは、琉球弧ということもできよう。しかし、池上にとってその琉球弧は「共同体のイメージをそのまま引き継ぐ」ものではなく、そこに相応しい「ソフトやアイデアを投入」して創られた世界である。生者と死者が行き交い、動物が喋るファンタジー的要素や強烈なマンガ的キャラクターは、琉球弧に相応しいソフトと見なされている。『風車祭』に登場する人物たちは誰もがユニークなキャラクターとして描かれているが、ここではフジとマブイのピシャーマ、豚のギーギーに触れておきたい。

『風車祭』は、一年後に迫った自分のカジマヤーを何があっても成功させたい1901年生まれのおバァ仲村渠フジの執念を縦軸に、1750年に生まれて二百四十年以上も彷徨っているピシャーマの話を横軸にして島の存続の危機を描く。ちなみに「カジマヤー」とは九十七歳の生年祝い(トシビー・ショーニンユーエー・ショーニンヨイ・マリドゥシヌユイ)のことである。誕生日から十二年目に巡ってくる生年祝いは数え年で、十三、二十五、三十七、四十九、六十一、七十三、八十五、九十七歳であるが、かつての沖縄では、七十三と八十五歳の祝いは盛大には行われなかったという。その代わり現在にも続く八十八歳のトーカチと九十七歳のカジマヤーを盛大に祝った。小説でフジのカジマヤーのパレードは次のように描かれている。

先頭を率いるのは小学校の鼓笛隊の大編成だ。(略)

造花と風車をちりばめた一九五九年型のキャデラックに乗ったフジが、沿道に集まった島人たちに手を振る。占領時代のアメリカ文化を飲み込んで沖縄化したキャデラックは、カジマヤーのために設計されたかと思えるほどマッチしていた。(758頁)

ここには文化と文化を融合させ変容し続ける島のエネルギーがある。フジは八重山の「マラリアの温床地帯」からも「生還」し、「米軍の艦砲射撃の隙間を縫って恋人との逢瀬を重ねた」強運の持ち主で、他人の迷惑を顧みずひたすら面白いことを探し回る、自分の好奇心を満たすことだけに邁進している人物である。あまりにも生に対する執着が強いため、「宿主の肉体の強靱さに手を焼いていた」マブイに逃げられるが、結局はマブイグミが成功し、無事にカジマヤーを迎えるのである。フジは、先述した大城貞俊「面影ウムカジヌの立てば」の加那につながる島の生命力を表象しているといえる<sup>22</sup>。

ピシャーマの造型には、石になった女性野底マーペーの伝承と明和の大津波<sup>23</sup>の歴史が付与されている。ピシャーマとは土族の娘の童名で「お嬢さん」を意味する。彼女は琉球王朝時代の頭職かしらの次の役職に就いていたマイアラカーシナゴヤー（前新川首里大屋子）の娘と設定されている。彼女は婚礼に向かう途中、神の通る道を横切り、生きのまま石にされてしまう。両親は彼女の死を信じられずヌジファの儀式を行わなかったためマブイは石に閉じこめられた。石のままの彼女は明和の大津波（1771年）で粉々に砕け散り、その時に目と声を失うが、マブイは解放される。ピシャーマによって王朝時代から1996年現在までの228年の島の歴史と民俗が明らかにされていく。八重山各地を彷徨ってきた彼女の現在の願いは後生グソーに行くことである。しかし、彼女のマブイは、島の人々に祀つられることを忘れさられた御嶽の神の怒りによって放たれた地震と大津波を阻止するために、珊瑚礁の防波堤となって島に残る。祖先と合体したマブイにはなれなかったが、彼女もまた島を守るマブイの一つになったのである。

洗濯好きの豚のマゾームノーナ（妖怪）ギーギーは、長生きした豚は人間の女に変身するという沖縄各地に存在する伝承が投影されている。ギーギーはピシャーマの目の代わりに果たしてもいる。ピシャー

マと高校生武志の恋を邪魔する者でもあるが、生きものと人間を区別しない琉球弧の思想を体現しているともいえる。

『風車祭』の特色はキャラクターばかりでなく、方言を駆使した表現にもある。近代の琉球弧の作家たちは沖縄方言をどのように日本語表現に組み込んでいくか、悪戦苦闘してきた。本州弧にも様々な方言があるように琉球弧も島によって言葉は異なる。例えば発音表記の問題はあるが「ありがとう」という言葉は、那覇では「ニフェーレービル」、宮古では「タンディガータータンディ」、八重山では「ミーファイユー」、与那国島では「フウガラサ」などと言う。どの言葉を使うかで、話した人物の島が分かるわけである。池上は一作目『バガージマヌパナス(わが島のはなし)』のタイトルにも明らかなように八重山の言葉を意識的に用いている。

『風車祭』では第一章から第十三章までのタイトルは、旧暦で実施される八重山の年中行事からとられている。漢字には主に八重山方言読みが付されているが、琉球弧全体に通ずる読みもある。各タイトルをあげ、その内容を『琉球国由来記』や宮城文『八重山生活誌』を元に簡単に説明しておこう。

まず第一章からそれぞれ旧暦の日付である。「八月十五日 <sup>シチ</sup>節祭」は後生の正月。「九月九日 <sup>チグザギ</sup>菊酒」は重陽の節句で男だけの節句である。「十月立冬 <sup>タニトウル</sup>種子取祭」は稲の種を蒔く行事。「十一月十一日 <sup>トウンジー</sup>冬至」は冬至で、ジュシー（雑炊）をたべて健康祈願をする。「十二月八日 <sup>ムーチー</sup>鬼餅」は沖縄諸島の行事由来であるらしく、餅を神棚や仏壇に供え健康を祈願する。「一月十六日 <sup>ジュウルクニチ</sup>十六日祭」は既に述べた死者の正月。「二月十五日 <sup>ムーチー</sup>ウマチー」は麦穂祭のこと。「三月三日 <sup>フシヤパニガイ</sup>サニジ」は婦女子の浜下りの日で、もずく、アーサを採ったり、貝拾いをしたりして、夜はそれで御馳走をつくった。「四月吉日 <sup>フシヤパニガイ</sup>草葉願」は害虫駆除を祈願する。「五月四日 <sup>ハーリニ</sup>海神祭」は競漕行事のこと。「六月吉日 <sup>アールニ</sup>豊年祭」は

五穀の豊作を御嶽に報告して祝う。「七月十三日 <sup>ソローン</sup> 盂蘭盆」はお盆のこと。そして最後の十三章「九月七日 <sup>カジマヤ</sup> 風車祭」はすでに述べた九十七歳の生年祭のことである。

キャラクターとタイトルからだけでも池上が「大和（本土）文化」とは異なる文化をもつ場として琉球弧を創出しようとしていることが分かる。さらにこの小説では武志、彼と同級生の玉城睦子、睦子の妹で五歳の郁子もマブイを落とす。子供たちのマブイを取り戻すために奔走するのはフジの娘で八十歳のトミ、トミの娘で六二歳のハツ、ユタの赤嶺、最高位のツカサ・ホールザーマイといったオバァたちである。オバァたちは様々な行事を挙行し、子供たちと島の危機を回避していく。池上永一は、初めは何の関心もなかった若者たちが、祖母世代の強引ともいえる促しによって沖縄の伝統や文化を継承する者に変容する過程をも描いていくのである。

池上永一はすでに見たように死者のマブイも含め、外部の文化や力を共同体に取り込み、共同体に新しいエネルギーを注入し活性化させる方法で、琉球弧の島宇宙をつくりあげる。そこにはこの島宇宙を引き継ぐのは子供たちだ、という強いメッセージも込められている。

#### 4. おわりに

島を守るユタになる少女の物語から出発した池上永一は、その後も琉球弧を救うキャラクターを打ち出していく。『レキオス』（文芸春秋・2000）では、沖縄社会の異分子と見なされる異風な能力を持つアメラジアンが沖縄本島の崩壊を阻止する役割を担う。九〇年代生れの子供たちが主演となる『ぼくのキャノン』（文芸春秋・2003）では、戦後、霊となって村を守ってきた日本兵の力が子供たちに継承<sup>24</sup>され、新しい村が建設されていく。琉球王国五百年の歴史とその滅亡を豪華絢爛な

意匠で紡ぎ出した『テンペスト』（角川書店・2008）には、列強の狭間に置かれた琉球の逆境を、自己の才覚を縦横無尽に駆使して「自分の力」で切り開いていく女性が登場する。彼女の健闘もむなしく王国は滅びてしまうが、彼女は王国は滅びてもこの「大地」とともに「未来」を「精一杯生きていこう」と語る。彼女の最後の言葉は、未来の琉球弧を生きる者たちへのメッセージともいえるだろう。さらに薩摩武士との恋が彼女に力を与えるというエピソードは、従来の薩摩と琉球のイメージを払拭するものでもある。

現代の沖縄文学に描かれるマブイの世界は、池上永一に代表されるような基層文化として流通してきた琉球弧のコスモロジーと深く結びついた世界と、目取真俊に代表されるそのコスモロジーが戦争や戦後のアメリカ・日本との関係で変容してしまい有効性を失った世界、という二極に分かれるようである。池上には基地問題など沖縄が抱える現実を直視していないという批判もあるだろうが、池上作品にはすでに見たように＜マブイ＞という共同体内部の価値観に、日本・アメリカといった外部の文化や力を組み込み、共同体を活性化させるという一つの可能性が示されている。池上はオリエンタリズムとも批判されるような沖縄表象によって、現実的には断ち切ることの困難な日米の力の構造を文学的想像力によって達成しようとする一つの方向性が認められるのである。

[注]

- 1 詳細は島尾敏雄編著『ヤポネシア序説』（創樹社・1977）、『島尾敏雄対談集ヤポネシア考』（葦書房・1977）参照。
- 2 琉球弧が首里王府を中心にした中央集権的ネットワークを形成していた事実は、1713年、琉球王府によって編纂された『琉球国由来記』にも明らかである。とくに共同体の宗教的拠り所である御嶽（ウタキ）の祭司者は、王府の最高位の神女聞得大君（キコエオオギミ）を頂点に各地域が統括されていた。また聞得大君の行儀

式は国王の長寿・王室の安寧・国家繁栄・五穀豊穰・航海の安全祈願などである。『琉球国由来記』によると御嶽と呼称されるのは、村を愛護する祖霊神、島立神（しまだてかみ）、島守神（しまもりかみ）などに限られる聖地だという。由来記には八重山の76の御嶽が紹介されている。ちなみに八重山諸島ではウタキではなくオン、ワー、ウガン、スクなどと呼称していたが、首里王府が総称としてウタキと名づけたという。村落の御嶽で祭祀を司る女性の長を沖繩諸島では祝女・神女（ヌル・ノロ・カミンチュ）というが、宮古、八重山諸島ではツカサ、サスといい、祭祀儀礼は地域によってかなり異なるという。池上永一『統ばる島』（ポプラ社・2011）は、八重山方言によって名づけられた竹富（タキドゥン）島、波照間（パティローマ）島、小浜（クモー）島、新城（パナリ）島、西表（イリウムティ）島、与那国（ドゥナン）島、石垣（イシャナグウ）島が、「御嶽」というネットワークによってつながっていることを表象した八重山諸島の物語である。『沖繩大百科事典』（沖繩タイムス社・1983）、『琉球史料叢書』『琉球国由来記』（鳳文書館・1988復刻再版）、『岩波講座日本文学史第15巻 琉球文学、沖繩文学』（岩波書店・1996）など参照。また得能壽美『近世八重山の民衆生活史』（榕樹書林・2007）には、近世における八重山諸島間の民衆生活のネットワークが明らかにされている。

- 3 桜井徳太郎『沖繩のシャーマニズム』（弘文堂・1973）参照。マブイは多様性をもって存在している。辞書的には「人間の身体に宿る靈魂を意味する沖繩語。マブリ、マブヤーともいう。生者の身体に宿るものをマブイないしイチマブイ、死者に宿るものをシマブイという」（『マブイ』『沖繩民俗辞典』吉川弘文館・2008）。『沖繩大百科事典』も詳しい。他に窪徳忠先生沖繩調査二十年記念論文集刊行委員会編『沖繩の宗教と民俗』（第一書房・1988）、赤嶺政信「沖繩の祖霊信仰」（『沖繩文化研究17』法政大学沖繩文化研究所・1991）、塩月亮子「シャーマニズムと死生観」「沖繩における死の現在」（『死の儀法』ミネルヴァ書房・2008）など。マブイについては多数の著作がある。
- 4 ユタもまた多様性をもった存在であるが、辞書的にユタとは「神がかりなどの状態で神霊や死霊などの超自然的存在と直接に接触・交流し、この過程で霊的能力を得て託宣、卜占、病氣治療などをおこなう呪術・宗教的職能者」（『沖繩大百科事典』）である。山下欣一氏はユタの言葉を人々が信じるには「ユタがすぐれた『話者』であることが必須の条件」（『南島説話生成の研究』第一書房・1998）と述べている。「二十代から三十代になって多くは夫婦の不和・離婚、病氣、事業の失敗など生活上の不如意・困苦が引き金となって神ダーリ（神がかり）といわれる心身異常（巫病）に陥」（『沖繩民俗辞典』）り、それを契機にユタになる。沖繩本島のユタに対して、宮古ではカンカカリヤ、ムヌスー、八重山ではニガイビー、カンピトゥ、ムヌチなどとも呼称されている。また佐々木雄司編『沖繩の文化と精神衛生』（弘文堂・1984）には、精神医学的な見地に立てば心身症と見なされる者が、沖繩ではユタを職業として日常生活を送っている例が挙げられている。精神医学的には治療を必要

＜マブイ小説＞にみる琉球弧の世界

とされるケースであるかもしれないが、沖縄では、その症状をユタが救っていると言えるのだろう。実際に沖縄では医学的な療法とユタの判断・力も借りて治療を行っている病院もある。

- 5 拙文「文学は沖縄をどう描いてきたか」（『東京新聞』2010年6月22、23、24日）参照。
- 6 沖縄諸島では他府県から来た「嫁」を「ヤマト嫁」という。吉江真理子『ヤマト嫁—沖縄に恋した女たち』（毎日新聞社・1999）参照。白石弥生氏も長野から来たヤマト嫁であった。
- 7 日本本土・大和と同義。沖縄方言のナイチャーは内地人、ヤマトゥは本土・大和人を表す。
- 8 マブイの表記は作者によって様々である。各作者の表記も用いつつ統一的には「マブイ」を使用した。
- 9 アーマンはヤドカリを総称する沖縄方言。八重山の先祖はアーマンという伝承も伝えられているが、典拠は不明ようである。
- 10 ここでは指摘するに留めておきたいが、アーマンはマブングミなどを信仰する琉球弧の人々を、あるいはそのような信仰をもてはやす外部の人々を象徴していると捉えることも可能である。「魂込め」のアーマンを巡る言説には鈴木智之「寓話的悪意—目取真俊と沖縄戦の記憶」（『社会志林』2001・48号）、松島浄「[[研究ノート] 沖縄文学ノート」（『明治学院論叢』2002・第672号）、斎藤祐「目取真俊—神女の届かない祈り」（『国文学 解釈と鑑賞』2009・2）、新城郁夫「母を身籠もる息子 目取真俊『魂込め』（『沖縄を聞く』みすず書房・2010）、スーザン・プーテレイ『目取真俊の世界』（影書房・2011）などがある。
- 11 加藤宏「戦後沖縄文学における表象の継承と転換」（『戦後・小説・沖縄』鼎書房・2010）参照。
- 12 琉球弧では女性に男性を守る呪術的な力があると見なされてきた。女性の霊的優位性については伊波普猷『をなり神の島』（初刊は1938年。『をなり神の島』東洋文庫1973）、佐喜真興英『女人政治考・霊の島々』（新泉社・1982）、比嘉政夫『女性優位と男系原理』（凱風社・1987）など参照。
- 13 1944年、第32軍沖縄守備隊司令部は、沖縄県下の師範学校と中等学校の男子生徒を軍属として動員する計画を立てる。鉄血勤皇隊とはその時、動員され組織化された学徒隊の総称をいう。
- 14 鈴木智之は「他者の記憶への回路」（『哲学』慶應義塾大学・三田哲学会2007・第117集）で、まだ戦争状態が続いている沖縄という読みとは異なる読みを模索している。目取真俊は『沖縄「戦後」ゼロ年』（NHK出版・2005）と捉えている。
- 15 対談「歴史を生き直すために」『野性時代』2008・9
- 16 [www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi51.html](http://www.webdoku.jp/rensai/sakka/michi51.html) 「WEB本の雑誌」「作家の読書道」（2006.1.27更新）2012.1.20閲覧。

- 17 「ユタは神靈に選ばれその召命によって成巫する」（「ユタ」『沖縄大百科事典』）といわれている。
  - 18 ユタの関わる領域は広大で、運勢判断、夢判断、結婚の相性、事業の成否、安全祈願など、人の一生と関わっているといえる。
  - 19 注16参照。
  - 20 「ジュウロクニチ」とは沖縄独特の行事で、旧暦1月16日に行われる祖先祭祀である。あの世（グソー）の正月といわれ、沖縄本島では死んだ人が初めて迎える正月を親族、関係者が墓に集まり盛大に供養する。「八重山では、新旧仏の別なく年中行事のうちでも盛大な祭事」（宮城文『八重山生活誌』）である。池上永一も「先祖の霊をもてなす十六日祭は若い祖先霊を慰めるためだといわれている。それ以上の先祖になると清明祭でもてなすと区分されている。若い先祖といっても三百年くらい前に生きていた人たちだ」（『やどかりとペットボトル』）と書いている。学校や役所も休みであったが、最近は休日の可否をめぐる論争になっている。
  - 21 文庫本には単行本には記載されていなかった歌謡・古謡の原歌が記載されている。本稿では「風車祭」のテキストは文春文庫を使用した。例えば単行本で歌われる「マヘラチユンタ」は、「マヘラチという少女の生い立ちは／五歳のときに父を亡くしてしまった／七歳のときに母を失い／孤児になった……」とあるが、文庫本ではさらに「マヘラチヌ女童ヌ生リヤヨ／五チンヤ親トゥヌケウダソーヌ／七チンヤアプトゥヌケウダソーヌ……」と、言歌が付け加えられている。言歌は喜捨場永珣『八重山古謡』（沖縄タイムス・1970）をもとに若干の書き直しがある。
  - 22 池上作品における圧倒的なオパエの存在感について池上は「年を取ったあとは好き勝手に生きていい、というのが僕の持論です。社会は、その好き勝手も許さないとイケない。若いときは周囲に叩かれまくり、苦労して、格闘して、でも、少し人生が落ち着いて、生きることが喜びになった時には自分の欲するままに生きていい。僕はおばあにそれを特権として与えたいんです。若い世代が気付かない、社会の余白部分をうまく歩き回っているのがお年寄りなんです」（『揺れつづける島の記憶』『Esquire』2004・2）と語っている。
  - 23 明和大津波については中生勝美「八重山の明和大津波と台湾離島の影響」（『現代史研究 第5号』2009・7）参照。
  - 24 鈴木智之「継承と和解—池上永一『ぼくのキャノン』に見る「沖縄戦の記憶」の現在—」（『社会志林』2007・7）参照。
- \* 本稿は拙文「研究ノート 沖縄文学にみる死者の存在」（『現代史研究』第5号、2009・7）に大幅加筆したものである。



## Okinawan Literature : Looking Through the Mabui

YONAHA Keiko

Professor, Faculty of Social Sciences  
Toyo Eiwa University

The aim of this article is to analyze the role and meanings in contemporary Okinawan literature of the *mabui*, a soul-like entity referred to by Okinawan people. Okinawan people believed that the *mabui* does not perish at the time of human death, but survives and lives its life after the physical death. How did this traditional but naive idea penetrate into modern literature, and for what purpose?

Within the five modern works I have analyzed, *mabui* is used not as an old-fashioned and poor idea, but as a prosperous one. The entity that endures existence after physical death can be superposed upon the Okinawan people themselves. The memories that have happened and the experiences now going on, all is playing on the *mabui*. This means the *mabui* is the subject (*subjectum*) in an original Latin sense. It is *mabui* that memorizes and experiences. This subjective aspect of *mabui* corresponds exactly to the historicity and the present state of Okinawa. The endurance of *mabui* can be equated with the possibility of Okinawan cultural identity.